

手と手と手

岡山発 国際貢献

「何でも話せるお兄さん」

「面白いわいさん」「恩師」

岡山市京山地区の環境改善活動（KEEP）に参加する小中学生は彼をこう表現する。「池田チルドレン」と自称することもある。

池田満之（西）岡山伊福町。KEEPの代表。年四回の環境点検では率先して川に入り、子どもに魚の捕り方を教える。本業は環境コンサルティング会社社長の社長。環境計量士。環境の分析やアセスメントを行う傍ら、岡山ユネスコ協会理事として十数年前から環境教育に携わってきた。

二〇〇三年から持続可能な開発のための教育（ESD）に力を入れている。KEEPはそのホームベース。現在は、生活の半分以上がボランティア

アで占められている。「おかげで収入は三分の一でも、アフリカで宿命を感じたんです」

ヨハネスブルク

〇二年九月上旬。南アフリカに、各国の首脳や学者、NGO（非政府組織）代表ら数万人が集結していた。池田はその中の一人だった。

ヨハネスブルク・サミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）。地球サミット（一九九二年）から十年を経ても、さらに深刻化していた環境問題と開発との調和、貧困の削減が議題の中心だった。

岡山市が市民参加で取り組む環境パートナーシップ事業がユネスコから推薦され、池田は岡山市長代理としてサミ

ット期間中にユネスコが主催した会議に出席し、発表したのだ。会議のタイトルは「持続可能な未来のための教育」。ESDだった。

岡山市の事業には池田自

身も参加していた。2%の登録市民を5%に増やす行動計画の発表は、多くの賛同を得た。「私の地域と連携できたらいわね」。こんな申し出を何度も受け



池田がESDを語る前に学長、副学長ら
—昨年10月、岩手大学

しかし、意見交換を重ねるうちに、疑問が膨らんだという。「岡山のように点のつながりでしかない行政主導の事業だけで地球環境は良くなるのか」。面であつながら、自立した地域が連携する必要があるのでないか。「行政頼みではなく、自分たち住民がつながって地域を変えていくことこそが国際貢献だ」

池田はヨハネスブルクでESDと出合い、「地域」に出合った。

実践

サミットで日本が提案した「ESDの十年」は、その年の国連総会で満場一致で採択される。

池田は翌年、全国のNGOや学者らが設立した「ESDの十年」推進会議（本部：東京、ESD-J）に参加した。生まれ育った岡山市京山地区で、公民館と小中学校、高校、ボランティア、大学生らにも動き掛け、KEEPをスタートさせる。初めての「地域デビュー」。「地域の実践がないと何も始まらない」。使命感にかられていた。

昨年六月、岡山市が国連大学（東京）からESDの地域拠点に認定されると、池田はESD研究会代表も務めながら、ESD-J副代表として東京と岡山を往復。年三十回を超える講演もこなす。

昨年十月下旬。池田は岩手大学（盛岡市）に招かれた。テーマは「大学におけるESDと地域貢献」。KEEPの活動が注目を集めた。「想像を絶していた」と、玉真之介副学長は感想を述べた。「これほど多様な人と団体が連携した教育活動はどうすればいいのか」（敬称略）

帰郷（京山の挑戦2）

住民のつながり求めて